



Title	〔紹介〕北海道大学学生自治会連合と「北大紛争」：手島繁一氏に聞く
Author(s)	田中, 智子; Tanaka, Satoko
Citation	北海道大学大学文書館年報, 21, 105-122
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99413
Rights	(c) 2026 Hokkaido University Archives
Type	other
File Information	06_tanaka.pdf



< 資 料 >

〔紹介〕北海道大学学生自治会連合と「北大紛争」

―手島繁一氏に聞く―

田中 智子

解題

本稿は北海道大学各学部の学生自治会を束ねる組織であった北海道大学学生自治会連合（北大学連）と1969年の「北大紛争」¹⁾について、当時北大学連の委員長であり、その後全学連委員長も務めた手島繁一氏（1974年教育学部卒業）に行なったインタビュー記録を再構成したものである。

手島繁一氏は1947年11月に根室町（当時）に生まれ、根室町立花咲小学校、美幌町美幌小学校、美幌中学校、札幌市立八条中学校、道立札幌南高校を経て、1966年に北海道大学（文類）に入学し、教育学部に移行、1974年卒業した。この間、教養部学生自治会執行委員長、1968年10月から1969年9月にかけて、北大学連の委員長を務めた²⁾。1969年秋から日本共産党系全学連（全日本学生自治会総連合）の副委員長を2期務め、1972年7月から73年7月まで委員長に選出された。北大卒業後は、法政大学大学院社会科学研究科に進学して博士課程まで進み、1982年からは法政大学社会学部非常勤講師、1991年からは設立に尽力した協同総合研究所の常任理事を務めた。2000年からは法政大学大原社会問題研究所兼任研究員などを務めた³⁾。2006年2月、札幌にUターンしてからは、「北大イールズ闘争や白鳥事件の歴史的分析につとめ、戦後の社会運動における学生運動史などを新しい視点で解明」してきた人物である⁴⁾。2024年12月、77歳で逝去した。

主著に、『ワーカーズコープの挑戦－先進資本主義国の労働者協同組合』（日本労働者協同組合連合会編、労働旬報社、1993年）、「学生運動の再出発とその展開－全学連結成前史－」『「戦後革新勢力」の源流 占領前期政治・社会運動史論 1945-1948』（五十嵐仁編、大月書店、2007年）、「占領後期の学生運動－反レッド・パージ闘争を中心に－」『「戦後革新勢力」の奔流 占領後期政治・社会運動史論 1948-1950』（五十嵐仁編、大月書店、2011年）、「特集 1950年前後の学生運動－北大・東大・早大：特集にあたって」『大原社会問題研究所雑誌』651号（2013年1月）がある。

当該インタビューは2022年4月15日、札幌市内のホテルで羽田貴史氏（東北大学・広島大学名誉教授、1979年北海道大学大学院教育学研究科博士課程中退）とともに行なった。その前日、「北大紛争」の回想・資料をまとめた「北大1969」編集委員会編『北大1969－あそこ私たちが求めていたもの』（メディアデザイン事務所マツモト、2021年）の出版記

念会が開催されており、インタビューにも同書に関する記述が散見される。同書においては手島氏も「私論「北大紛争」」を寄稿しているが（第一部第二章）、そこでは「六九年北大紛争の記憶がほとんどない」として、自身の経験についてはあまり多く記されていない。本インタビューはそれを補完するものであり、北大学生運動史の貴重な資料の一つとして公表する。

本稿においては、同インタビューの記録から北大関係の部分を中心に抜粋、再構成し、適宜注釈を補った。公表にあたっては、掲載許可を得る前に手島氏が亡くなってしまったため、手島氏の弟・明夫氏の掲載許可をいただいた。手島氏の生前に公表できなかったのは悔やまれるところであるが、本インタビュー記録を埋もれさせることなく、北大学生運動の貴重な記録として公表することが、手島氏への供養につながると考える。

以下、インタビュー記録を「1. 北大に入学するまで」「2. 北大学連委員長就任の経緯」「3. 北大学連の学生運動」「4. 堀内寿郎学長と北大学連との関係」「5. 北大学連委員長として東大闘争に参加」の5つの項目に分けて掲載する。掲載にあたっては、用語や人名に（ ）や脚注で説明を加えた。なお、インタビュアー（羽田・田中）の発言は適宜修正したが、手島氏の発言は可能な限りそのまま掲載し、事実関係等の誤りが発見できた箇所は修正するか注を付している。本人の記憶違いで語られている発言が残っている可能性があり、また手島氏の置かれていた立場上のバイアスがかかった発言もみられるが⁵⁾、北大紛争の一当事者の立場から見た歴史の一側面として読んでいただければ幸いである。

1. 北大に入学するまで

田中：まずは北大に入学されたいきさつからお話いただければと思いますが。

手島：うち平凡なサラリーマンの家庭で、その長男なんですよ。その当時のサラリーマンの経済状況からいうと、長男は地元の国立大学に入らなければ一家全滅だということになりがちなところで。それで地元の国立大学しか受けなかったし、僕、北大しか受けなかったんですけど。

田中：すごいですね。

手島：もし北大が駄目だったらもう就職っていうふうに考えていたわけ。

田中：そうだったんですね。そういえば地元がどの辺かをお伺いしていませんでした。

手島：札幌です。

田中：札幌で、国立大学といえばやはり北大だということですね。

羽田：札幌はどちらの高校だったんですか。

手島：札幌南高校です。

羽田：南高は卒業式の時に卵ぶつけるんで有名なんです。

手島：いや、僕らの頃はそんなことはなかった。僕、団塊の世代のトップランナーでしょ、昭和22年生まれだから。僕の学年の3つ下までは小学区制なんですよ。その

地域ではこの高校しか行けない。

田中：小学区制ですね。

手島：僕の1963年入学か、その時でも僕のクラスの3分の1弱の方が高校卒業で就職です。今のような、南高というと秀才の集まりで、みんな進学するということは全然ないです。

田中：札幌南は秀才が多いということは聞いたことはあります。

手島：僕の3学年後から大学区制になってそういうふうになってくんだけど、僕なんかが最後の小学区制の世代でした。大体その当時、僕の学年は、これは教育行政の問題だと思うんだけど、団塊の世代の対策が札幌市も北海道も非常に不十分で、急に増えるわけでしょ。どういうふうにして増えた高校生を収容するんかってことで、札幌南高ってネームバリューあるじゃないですか。その高校の定員を1学年500人じゃなくて1,000人にしちゃったんです。

羽田：1学年1,000人。20クラスですよ。

手島：20クラス。それで急増を乗り切ろうとしたのね。新設高校作ったりなんかするんじゃなくて、旧来の高校の中の名前がある高校を増やしちゃえば、みんな満足するだろうというんで、そういうふうになったんです。だから20クラスなんですよ、1学年。

羽田：当時札幌は何学区あったんですか。北と南と東、西高があったと思うんだけど。

手島：いわゆる普通課程は東西南北。それと旭丘。これはいわゆる市立。それから月寒はまだ札幌市でなかったな。豊平町だったかな（注：豊平町は1961年に札幌市と合併）。普通高校の課程は5校。だから5学区ってことですね。

羽田：20クラスはすごい。

手島：しかも20クラスに増やしているんだけど、校舎そのものは増えてないわけ。どうしたかという、都心にある、今の札幌市役所ってあるんですね。そこ昔、旧の中央創成小学校っていうふうに言ったんですよ。中央創成小学校は都心の小学校だから、全然生徒数が少なくなっているんです。その3階部分、この部分を急増の校舎として1年生を収容するふうにしたのね。めっちゃめっちゃです、結構。体育館も使えないし。小学生と一緒に体育やるわけにいかないでしょ。1階2階が小学校で、3階が高校生になるわけだから、3階から出てはいけないっていう1年間でした。

田中：そうだったんですね。

手島：これ、くだらない話ですけど。

田中：いえいえ。

手島：体育の授業が一番困るんだよね。近くにある中央体育館っていう体育館使うか、もしくは円山公園っていう陸上競技場に行くんだけど。札幌市役所、都心の真ん中にあったでしょ。体育の授業1週間1回だけ、一日使って行くんだけど、行く間に男子生徒がほとんどいなくなるんだ。

田中：なるほど。せっかく高校のお話もありましたので、昨日（注：『北大1969』出版記

念会のこと、以下同じ) 高校でも民青(注: 日本民主青年同盟、日本共産党系)をやっていて、その後転向された方がいるというお話もありましたが、高校の時はなんかそういった活動はされていたのでしょうか。

手島: いわゆる政治組織民青同盟って、その頃は昨日羽田さんが説明されたけど、もうそれしかないから。あったんだけど、多分南高校はかなり強かったと思う。先生の「息」もあって。ただ僕は高校時代は反民青なんです。反民青の立場から候補者を立てて、その選挙参謀をやって。

羽田: ただ民青って言っても、僕の出身校の帯広柏葉高校にもあったけど、社会科学研究会とか、そういう部活の形態取っていましたが、むき出しなんです。

手島: いや、むき出しじゃないです。一応、新聞会と生徒会が民青の拠点であるというふうにいわれていたんだけど、実際はよく知りません。社会科学研究会みたいなハイカラなもんなかったような気がしたな、うちは。

羽田: 僕の時からいったら5年違うんですね。5年間でやっぱりそこら辺が急にスマートになるというのがね。

手島: そうだね。かなり変わってきているね。それとやっぱり中に相当な反戦高協だったか反戦高連だったかっていう(注: 反戦高校生協議会(中核派系)か)、向こう側の組織はどんどんできてくるわけ。これは僕らの3学年ぐらい後からかな。それが高校紛争の主役になってくんだけど。それは当然大学からのオルグが入るんですね。それ以前は、僕らの頃までは、恐らくほんとに民青一本じゃないけど、民青しかなかったのね。だからみんな何も考えずに、政治的な意識が左翼勢力は要するに民青であるというのが当たり前と。それで高校時代だからそんなに立派な理屈があるわけじゃなくて、そういう一党派に偏る生徒会もよろしくないということで、反民青で。

田中: それで選挙活動もされたということですね。

手島: はい。その立場が大学入った後もしばらく続いて。その頃、1966年に北大に入るんです。入った時はキャンパスの状況、政治状況をいうと、圧倒的に民青派なの。対抗派が革マル派(日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派)っていうのがあったんです。それから例の三派って、三派っていうのは、ブント(共産主義者同盟)、それと社青同(日本社会主義青年同盟)解放派と、それから中核(革命的共産主義者同盟全国委員会)、この3つをまとめて三派って。1966年に三派が合同して三派全学連って全学連つくった。それがいわば70年安保闘争の要するに主役になるのね。僕らが入った頃は三派は北大では全く低調で。入学した時の学内掲示板に、以下の者、神田の古本屋で万引き行為したために、何某かの停学処分にする。三派の親玉がそろってその処分になっていたわけ。というふうな状況があって、全く三派は駄目だったのね。それが息を吹き返してくるのは、1967年の羽田闘争。これから事情がものすごく変わってくるわけ。という状況でした。

羽田: これ確か川上徹さんの民青系全学連は、66年でしたっけ。いわゆる全学連ね。

手島：66年の12月だったと思います⁶⁾。

羽田：そうすると当時の民青というものの存在っていったら、どういう形で、自治会じゃなくてあったんですか。

手島：民青同盟は民青同盟としてあるんですけど、その民青同盟が自治会を押さえて、それからあと北大新聞局。これは伝統ある組織らしいんです。普通のあそこの本部の向かいに学生の・・・。

羽田：解放会館。

手島：解放会館。そこで一番いい部屋。他が要するにクラブの3倍か4倍ある部屋が、新聞会の部屋がある。ここにブントがいたの。そのブントの指導者が、これは後で分かったことなんだけど、野田正彰という有名な精神医学者が新聞局のボスだった。『北大1969』がかなり引用しているから⁷⁾、その方の本は読んだほうがいいと思います。その頃も新聞局を中心とした数少ない北大三派系の指導者として、その三派系の活動がよく分かります。

2. 北大学連委員長就任の経緯

田中：1年生の時、67年1月に教養部の自治会委員長になられて、その後2年生で学部移行された後は、北大学連の委員長になられたということですが、その時は選挙とかはあったんですか。（注：「手島繁一さんの略歴」によれば1966年6月より自治会執行委員長、1968年10月より北大学連執行委員長）

手島：これは北大学連2次組織だから、各学部から選ばれた代議員が北大学連の代議員大会っていうのを開催して、そこで選ぶことになるわけ、直接選挙ではなくて。その頃、僕が1967年だったかな。68年かな。

羽田：68年だと3年生ですね。

手島：3年生の時だ。67年は昨日来た宮下君（注：宮下純夫、理学部、北大学連第2期委員長）って人だ。僕67年って勘違いしたのは、宮下君、理系の人なのよ。理学部の地質鉱学で、フィールドワークが結構あるの。そういう時に僕副委員長で代行していたから、それでちょっと勘違いってことがある。実際は彼がフィールドワーク行く時に僕が代行で委員長でやっていたから、結構、ほんとは任期1年なんだけど、実際上1年半以上はやったことになるね。69年の途中まで。

羽田：北大理学部強いんですよね。確か北大学連の部屋も理学部の中にありましたよね。

手島：そう、理学部です。理学部自治会室が北大学連の部屋と同居していたわけです。

羽田：地鉱がやっぱり強くて。

手島：そうそう。

羽田：これは湊正雄（理学部教授、地質鉱学）先生が、地学団体とか地学研究会だっけ。

手島：地団研（地学団体研究会）。

羽田：地団研っていうのは有名な民間の自主的な研究組織で、地質調査は石掘って判別するから、たくさん人がいたほうがフィールドをたくさんつくれるんだよね。だから民主的にどうやって運営するかっていう点では、井尻正二さんが理論を作って、その影響で民主的な人がすごく多いんです。あとは教育学部が、これも全国の大学、どこでも教育学とか、民青系が強いところですよ。

田中：なるほど。

手島：その地団研は、最近でもないか、前からも相当批判されている。地質学の基本的な理論、プレートテクトニクスの導入を最後まで抵抗したのが地団研運動だっていうんです。今パラダイムシフトが起こっています。ただその当時は地団研運動の全盛期、地団研、地質学科はどこでも民青系が強いってことになる。集団主義、さっき言った人がたくさん必要ってことで、集団主義ってこと非常に強調するわけよ。教育学のほうでもそういうのはあった。集団主義がとにかく大切なんだってね。民間の教育運動でもあったよね。

羽田：マカレンコとか集団主義教育やって。これはこてんぱんにある時期から批判されます。ソビエト教育学全体が批判された。

手島：これも余談になるけど、原武史さんっていう政治学者が、デビュー作は学術系論文じゃないんだけど、ちょっとしたデビュー作、文芸作品で『滝山コミュン』（注：『滝山コミュン一九七四』講談社、2010年）っていう本を書いた。自分が生まれ育った東京都東久留米市の滝山団地においてどういう教育がなされたのかってことを書いて。その時に滝山地域の教育はほとんど集団教育理論。都留文科大学卒業の先生たちが集団教育理論、そういうものが天下を制していたんだけど。まるで、彼に言わせればコミュンみたいなものであって。彼は非常に自分の個性を大切にす人だったから、そういう集団主義的なみんな仲よく元気、こういうのはなじまない人にとっては非常に桎梏を感じたっていうことを書いているんですけどね。僕はなるほどなって。やっぱり正直あったわけ、地学でも教育でも。それは今言ったように一種のパラダイムシフトが起こって、今全部それが崩壊しちゃっている。

羽田：民青か革マルって、政治的文脈での党派や議論の問題だけじゃなくて、人間の組織論とか、いろんな微妙なものが重なり合いながら、人間の行動様式とか、属する集団って決めていくんだよなっていうのは、すごく思いますよね。どこの集団に帰属するかという。それがいろんな政治的な文脈での位置付けも自分で決めてくっていくのが。

田中：なるほど。

羽田：68年に3年生になられて。

手島：正式の北大学連委員長になったのは68年の確か夏かな（注：「手島繁一さんの略歴」によれば1968年10月）。北大学連大会、何月だったかな。ともかくそのぐらいの時期です。3年生になって。

羽田：これ、当時の北大生って、就職だって4年生になる時まで考えたこともなかったんだけど。どうなんですか、当時、3年生だと自分の進路として、僕の同級生でも職業的革命家みたいなのを自分の希望だっていう、そういう人が出る雰囲気はあるんですよね。

手島：ありましたよね。

羽田：そのあたりどうなんですか。そういう進路選択でそんなことってというのは、やっぱり多少考えたもんなんですか。

手島：ありましたよね、選択肢の中には。68年6月（注：「手島繁一さんの略歴」によれば1968年10月）、北大学連の委員長に正式になった時はもう共産党員だから。当然書記の時、革命家っていうのかな、いわゆる専従っていう言葉を使うんだけど、そういうふうになるっていうのはかなり有力な選択肢だった。

労働市場は圧倒的売り手市場なんで、高度成長の真ただ中。確か教員の採用差別だとかっていう深刻な問題はあったんだけど、それから高野事件（注：東北大学卒業生高野達夫氏が経歴詐称で三菱樹脂から本採用拒否された事件）みたく、例外的なそういうものあるんだけど、大きく市場見れば圧倒的な売り手市場で。実際みんなそうなんだけど、多少活動しても全部取っちゃうわけ。取っちゃうわけっていうか、就職できちゃうのね。だから職業活動家で考えたっていうことは、そこに憧れたってことはあるんだけど、圧倒的に恐らくこのまま行っちゃうとどっかの大企業に就職してしまうと、そこが嫌だっていう、そういう気持ちもあったよね。

羽田：北大生だからね。やっぱり北海道の中では王様みたいなもんだから、選ばなければ必ず中堅企業に就職できて、幹部なんですよ、絶対に。

手島：羽田さん時の同級生、就職大体どういうところに行きました、教育学部。

羽田：どこ行ったかな。やっぱり教師になったのが多いですよ。

手島：うちの時は違うんだわ。教師は少ないの。民間企業。特に僕らの頃からじゃないか。マスコミとそれから大手の、その頃、百貨店、デパート。

羽田：でも、73年のオイルショック。

手島：あれは苦しかった。

羽田：僕はあの時3年生だったけど、教養部に行った友達がすごいぞと。もう夏なのに授業に学生が出ていて大騒ぎして、見に来て。オイルショックがやっぱ厳しかったんですよ。

手島：なるほど。それはそうかな。

羽田：それでみんな勉強するようになったんですよ。こっちはあんま勉強する気ないから、結局大学教員でもなるしかないとか。大学院でも行くしかないかと。でも就職説明会の時は道内の企業が来て、ランチごちそうして、来てくれたらうちの幹部になれますと。うちも大きくなったので幹部を北大から取りたいっていう。

田中：いい時代です。

羽田：今だったら考えられないです。

手島：ほんとにそうだ。

(中略)

羽田：そういう雰囲気でもありましたよね。71年入学の僕でも、なんか大企業よりはむしろ農協とか、そういう生協とか、そういうところの活動で何かもうちょっと世の中のためになりたいっていう雰囲気はすごくあった。

手島：あったからね。今でもそうだけど、特にこういう若い学生が、頭固いやつは資本主義やってきたから、大企業、資本主義企業に行くよりは、例えば生協だとか農業組合だとか、そっちのほうがいいみたいな、そういう考え方もあったよね、活動家の中では。

3. 北大学連の学生運動

羽田：北大の場合って大学独自の課題と、ベトナム反戦のような全国的な課題と、それから東大、日大闘争、この3つの要素が、どういうふうな関連にあったんですか。

手島：さっき言ったように、例えば10・8の羽田闘争、あれで相当雰囲気が変わったっていうのは、こいつら本気だになっていうことが大体学生分かってきた。ベトナム反戦は、これは誰でもベトナム行かなきゃいけないんだけど、ただそのこと自身ではここが要するに日共系って言っちゃあれだけど、弱いところで。

べ平連（ベトナムに平和を！市民連合）は直接行動なんだよね。一人一人ができる行動を訴えるわけよ。すぐできるわけ。殺すなっていうふうにゼッケンかぶって。例えばティーチ・イン（注：学内討論集会）だとか代議員だとか、全部アメリカの社会運動の模倣だから。社会運動ってそうなのよ。全部模倣から始まるわけよ。ティーチ・インなんかそれ以前日本では全然なかったんだからさ。そういう一人一人が参加できる行動をべ平連が訴えるわけ。ところがこっち側は、何言うかっていうと、統一戦線なんだよな。統一戦線って何していればいいのかって学生からしてみれば、昨日もちょっと言ったんだけど、分かんないわけよ。

正しいことは正しいね。ベトナム反戦のために、ソ連、中国、仲が悪かったけど、ソ連と中国は手を組んで国際統一戦線を構築しなさい。それからアメリカ国内の反戦運動とも連携して、国際的な統一戦線でアメリカ帝国主義を追いつめようと。それから同じく日本でも、日本政府のベトナム反戦、ベトナム戦争への加担をやめさせるために、社会党、共産党、革新団体が全部手を組んで、佐藤内閣を追いつめようと。だけど学生は一人一人は何をしていいか分かんないわけよ。路線的にあんたの方言っているの正しいかもしれないけど、だけど俺は何するのっていう。

昨日もちょっと言ったの、もう1968年ぐらいになると、やっぱり70年っていうのは結構左翼の一つの目標だったのね。60年の次は70年にもう政権を倒すんだと。60

年でできなかったものを倒すんだっていう、左翼がみんな一致した気分だったんだね。それが68年頃になると学生たちの戦闘意欲、戦う意欲がやっぱ増してきたと僕は思うよね、相当。それにわれわれは、私も含めてだけど統一戦線っていうか、日米2つの敵だったから。立派なこと言っているんだけど、ほとんど学生に響かなかったんじゃないかな。

羽田：抽象的観念性においては、民青も革マルも中核も、共通するものだったですね。

手島：あったね。

羽田：世界情勢から説き起こして、そこから人間の行動様式を決めていくロジックと比べ、やっぱり身の回りから入るべ平連は親和性があった。自分が何するかが問題で、別に民主的政府ができたからといって、ベトナム戦争がなくなると限らないし、権力奪取が最大の目的だっていう政治路線と、民主主義の実現っていうところ、実はイコールじゃないですよ。そこがうまくかみ合わない。もう少し言うと、民青の最大母体って、民研サークル「わだち」で、そこらが「歌って踊って民主主義」って、結局笑われていたけど、そのところの軟弱路線が、どう見てもかみ合わないんですよ、イメージが。

手島：この中(『北大1969』31頁)に書いたんだけど、1967年の10・8の羽田闘争で山崎博昭君が亡くなった時に、それはそれなりに直接行動なんだけど、ちょうど10月8日に日本共産党が多摩湖畔で、赤旗まつりっていうのをやっているんだよ。

田中：はい。確かに書かれていました。

手島：赤旗まつりはヨーロッパのフランスのユマニテか、イタリアのユニタのお祭りをまねして、まねしてっちゃまた怒られるかもしれない。それがびったし向こう側の宣伝にはまるんだな。山崎君みたく戦争反対で、佐藤首相が東南アジアに旅行に出掛けるのに命がけで戦った学生が、一方、日共民青は多摩湖畔で「歌ってレーニン、踊ってマルクス」というのが。「歌って踊って民青」っていうのは、これは昔から、60年安保の時からずっと実は言われているパターンなんだけど、それがたまたまびったし合っちゃうわけよ。山崎さんの時だなんて俺も後になって感心したんだけどさ。

その頃から戦線が「平時の民青、戦時の三派革マル」って、こういう俗言がそういうふうになってくるんだね。やっぱり全体として左翼戦線は70年決戦論、それが学生の中に次第に浸透して、しかも一方情勢ではベトナムの戦争は深刻になっていくし、明らかに沖縄からB52が飛び立ってというような、日本の加担も明確になっていくし。

黒人、アメリカの場合はもう一つその時代に公民権運動があった。公民権運動はそれほど学生の中では、その当時は関心は持たれなかったのね。やっぱり国際的にはベトナム反戦運動で、それから1966年ぐらいからやっぱりもう一つ中国の文化大革命があった。これはただ、造反有利だよ。中国でいえば従来の偉い人たちが紅衛兵によって打倒されていくわけだ。学生の反論、学生が教官っていう今までは絶

対的な権威だったんだけど、それを倒すことが可能であるみたいなことを中国の文化大革命から学ぶわけで。われわれも学んでいくわけで。それを最も誤解して受け止めたのが、おそらくヨーロッパの学生運動、知識人だったよね。ヨーロッパでマオイズム（注：毛沢東主義）がはやるわけ。一種のオリエンタリズムもある。ソビエトの社会主義がダメなことは、ハンガリー動乱もあり、ヨーロッパの知識人はみな知っている。それに対して新しい社会主義として毛沢東とキューバのカストロ、チェ・ゲバラがあり、60年代後半の学生運動で、日本では良く使われたのがゲバラ、ヨーロッパでは毛沢東とゲバラだった。

羽田：北大の中では毛沢東の影響があったんでしょうか。

手島：日本の中では毛沢東の影響はそれほどではないが、北大の中で新しく出てきたのがML派（注：共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派の略称）だった。いわゆる三派系の中でね。これは事実かどうかかわからないけれど、69年に本部が封鎖された時に、封鎖した学生が、本部から北京に電話しているという情報が流れたことがあった。

羽田：どうでしょうね。当時は、大学から直通で海外に電話できなかったんじゃないですか。交換を通さないと。

手島：なるほど、今でいうフェイクニュースが流されるほど、中国の影響が一定あった。

羽田：69年の時はまだ北大なんですか。それとも全学連のほうに行かれるんですか。

手島：一応1年任期、69年の夏までが僕の任期なの。69年の要するに4月10日から入学式から紛争始まるんだけど、その紛争の前半は私が委員長なんです。

羽田：全学連の。

手島：いや、北大学連の。ただこれも僕の前任の宮下が地鉾のフィールドワーク出ていなくなったから委員長だった。僕の時東大闘争が終盤になってくるわけね、68年秋から。そうすると全学連中央執行委員って、全学連の役員会ってひと月に1回ぐらい東京に行って会議やるわけですよ。それは普通のパターンとしてあるんだけど、東大闘争が秋頃から非常に熾烈になってくると、行ったまま帰ってこられなくなっちゃう。足止め食らっちゃうわけ。多分9月、10月、11月って、1回東京に行ったら2週間ぐらい東京いたんじゃないかな。それで僕覚えているのは、全国の共産党組織から何度も大切な幹部足止めして、うちの大学は火の車だとか何とかって、抗議が続々来たという話は聞いたことあるんだけど。

そういう状況で、僕68年の秋以降は名目的な北大学連の委員長で、その次の北大学連の委員長になる腰岡君（注：腰岡滋、理学部）が実際の委員長代行だった。その最も極端な例が、明けて69年だね。68年は東大闘争の話はいいんだけど、9月に東大の病院封鎖阻止⁸⁾、それから11月に図書館封鎖阻止⁹⁾って大きなものがあった、明けて69年の1月に安田講堂でしょ。1月の安田講堂が何日だったかな。1月の5日か6日に全学連中央執行委員会があったのね。この1月の執行委員会でアジ

る(注:「扇動」の意)わけだよ。その時の委員長が田熊(注:田熊和貴、東京経済大学)っていうんだけど、ロシア革命(注:第2次ロシア革命)が非常に危機の時に、クロンシュタットで水兵たちの反乱があったと。クロンシュタットってレーニングラードのすぐ真向かいにある、バルト海に直面する、ロシアか、それからソ連にとっては最大の軍事基地なわけ。そこの水兵たちが社会主義政権に反対するわけよ、ロシア革命に。要するに革命の反乱を成功させてしまえば、ロシア革命全体が危殆に陥る危険性があった。その時にレーニンはどうしたかという、革命の最大の危機の時に立ち上がるのはおまえたちだと言ってその時の幹部を全部投入したっていうんだよね。それを全学連中央執行委員会でアジるわけよ。東大闘争のこの局面で、戦うのはおまえたち幹部だと。全国から来ている中央執行委員、一応幹部でしょ。そのまま東大にとどまってる。

4. 堀内寿郎学長と北大学連との関係

田中: すいません、また北大の話に戻したいんですけど、堀内寿郎学長との関係がやはりすごく気になる場所なんですけど、全共闘は堀内民青打倒みたいな話がありましたけど、実際には堀内学長と北大学連との関係、共同して何か改革しようとしたとか、そういったことはあったんでしょうか。

手島: 僕はこれ昨日の話、逆に羽田さんとかそれから彼の話を聞いて学ばされたことなんだけど、やっぱり学長選3回目のトライで堀内先生は。接戦、接戦の勝利だから、職員組合にとっては本当に待望の政権だったと思うんだ。北大の職員組合は結構左なのね。昨日の話で一橋と麹町と同じようで、最左派なんだな、あれは。職員組合の委員長をやっていた方にも聞いたことがあるんだけど、うちの組合ものすごい左だったというふうに本人は言っていたの。全国的な大会に出てくるとすぐ分かって言って。それはともかくとして。職員組合の強力な運動の結果として出てきたのね。

学生は教員の人事の問題だから直接口出す関係にはないし。希望を述べることは述べるけども。選挙運動直接することもないんですが。ただ堀内さんが出てきて、学生と一緒に、学生の言うことに耳を傾けてくれるっていう姿勢は非常に感じましたね、最初から。それまでの権威主義的な対応、前の学長が杉野目、その後が古市二郎さんってのがいて、古市さんが病気で早く退陣してしまったから堀内さんがなったと。いずれにしてもその前の杉野目晴貞に象徴されるような、学生との関係で権威主義的な考えは、最初から彼は、堀内さんは持っていなかったということで。

就任して、昨日の話では68年の新入生歓迎オリエンテーションかなんかに、学長の講演とそれから僕の講演が2つ並行して行なわれる。やった覚えは全然ないんだけどね。その時に山本哲君って新入生が堀内さんに手を上げて質問して、こいつは

大したもんだって思ったっていうのは、実は入学式じゃなくてオリエンテーション。大学当局と北大学連が共催したわけじゃないんだけど、そういう形じゃさすがにやっぱりできないんだね、いくら学長がリベラルでも。ただ学長と北大学連委員長が同じ演壇で相互に演説し合うっていうのは、これは新しい形だと思います。

そこら辺からそういう学長の姿勢を、われわれはかなり好意的に受け止めたね。そしてその後5月かな。それまで膠着状態にあった新寮問題で大きな転換があるんです。これは『北大1969』の本の中に、詳しいんだけど。この282ページ以降の皆川吉郎さん。この時北大寮連の委員長やったと思うんだけど。特にこの記事だね。285ページの1967年5月21日の記事で。

田中：そうですね。67年5月21日の毎日新聞の記事で。

手島：北大の寮問題、一挙に解決。堀内さんの一言で。「君たちを信じる」という一言で、入寮選考権うんぬんかんぬんもめたところに、「君たちの声を信じるよ」だね。これで解決したの。これは毎日新聞の道内版なのね。

これちょっと編集裏話なんだけど、縮刷版って全国紙、全国版でしかないのね。恐らくこれ地方版だろうと思って、たまたま編集委員の中に菊池君って毎日新聞の記者がいたのね。もう退職しているんだけど。その方が毎日新聞の北海道支社に行って、最初はけんもほろろの対応だったんだけど、毎日新聞の記者やっていたんだっていうことになると態度が急に変わって、倉庫の中から道内版の新聞を見つけてきて、それで載っけてある。かなり苦労したの、この記事を入れる時。だけどその記事はかなり正確にその当時の堀内さんの姿勢転換と、それによる寮問題の解決と、それを学生がどう受け止めたのかということが書かれている非常に貴重な記事だと思います。

田中：ちなみに寮問題の反対闘争には結構関わられたんでしょうか。

手島：北大学連と北大寮連は、恵迪寮が、常に一貫して共同してきた。主体はもちろん北大寮連なんだけど、北大学連は一貫して寮連を支援して、共に交渉したり戦ったりしたから、運動したりしたから。これはそうだと思います。

田中：結構寮で民青と革マルが争っていたっていうことはありましたけど、その時はどうだったんでしょうか。

手島：これはその前に、自主的な入寮選考、つまり選考権を大学側が削る、駄目だよっていった時に、入寮選考こっちが学生が強行したのね。その強行したことに対してその当時の寮長4人に対して処分が出されたの。停学かな。処分出されて。寮長4人の中には民青っていうか、日共系もいるし、それから革マル系もいるけど、この処分反対、処分撤回については一致したやつなんで。それを要するに堀内さん、この団交でこの処分は取り消しというふうになったんで、これは党派を超えてパチパチパチになった。

昨日ある先輩が言ったのは、佃っていうのが一緒に地域活動をやって、佃ってい

うのは楡影寮長で処分されたやつだったんだけど(注:革マル系の活動家)。それでその後40年、50年たって、同じ地域活動で一緒になったっていう。これは美談です。

田中:あとは、その寮問題の解決があって、その後「大学民主化路線」とか「全構成員自治」などで、かなり堀内学長が改革を進めていこうとしたと思うんですけども、それに対しては何か北大学連側で協力するとかいうことはあったんでしょうか。表だってはなかったかもしれないですけど。

手島:そこんところはほんとに東大闘争ほどじゃないね。学内問題はそれでほとんど問題がなくなって、寮問題が一番引っ掛かってくる。あとは本当に、例えば堀内先生おっしゃっている少人数教育の徹底だとか、こういうことに対して学生運動は取り上げないでしょ、あんまり。堀内路線のその後については、学生運動的な関わり合いはほとんどなかったと思う。それこそ政策的な深化は。難しいけどね。大学の制度だとか在り方だとか。特に教育の在り方が、学習権の基本ということは学生運動の要件に据えていいんだけど、それを具体的にどういう形で出していくのかっていうことについて、政策的な深化をする努力っていうのは、今言ったようにベトナム反戦あるし、東大闘争あるして、70年安保あるして、そういう中ではほとんど私の中で顧みられることはなかったと言っていいんじゃないでしょうかね。

ただ、そういう学生運動と違って、院生協議会¹⁰⁾はやっぱりそここのところを出してくるわけ。今日の午前中話し合ったけど、例えば研究者としてどうリリースしていくか、あるいは教員はそれに対してどう関わるべきかとか、そういう特に新しい研究者、それがいいか悪いかはともかくとして、そういう教育だとか、それから学問の内容に踏み込んだような政策論議っていうのを常に主導してきたのは院生なんだよね。そういうところのほうが必要にむしろ主じゃないのかな、民主化運動の担い手として。

實際上、院生の数も高度成長でどんどん増えてくわけ。特に工学系が。僕の任期だった1960年代の後半は、工学部も確か2.2倍になったと思うよ。それはもう理工系を増やそうというのが国の政策だから。そういうところだと思います。堀内民主化路線に対して政策的な提案だとか、タイアップだとか、そういうことは学生自治会の運動というよりは、院生協議会の運動がこれを主導したというふうに私は思っているんですよ。

羽田:学長と言っても実際の教育研究の場っていうのは部局単位なので、いくら学長言っても、学長がここ変えろとか、できないんですね。せいぜい学生部長の選挙に対する学生参加の問題とかね。もともと学長に対して何か物を言って、その結果変わるということが、教育研究の立場からするとあんまりないので、結局部局単位で理学部でどういうふうに、理学部の学生自治会とかね。そんなところを細かく見ないと。

田中:そうですね。確かに。

手島:もう一つ付け加えとくと、いわゆる闘争、大学立法反対闘争なんかではかなり学長

と一緒に。全北大臨時集会っていうの何回かやるんですよ。これは大学ぐるみで戦うっていう、大学立法と対決するという、そういう路線でやるんだけど。学長や教員が、教授団のデモっていうのは他の大学でもあるんだけど、学長を先頭にしたっていうのは、それほど全国的にはなかったような気がする。そういう意味では結構大きな意味があった。

5. 北大学連委員長として東大闘争に参加

羽田：各大学の学生自治会の幹部が東大闘争で現場に出てって、なんか費用対効果から見てもおかしいですよね。どう考えてやっているのか。

手島：それは中央執行委員を大学に帰さないで東大にとどめておく一つの理由であると同時に、全国動員をかけるわけよ、共産党組織を通じて。それで僕はその時1カ月いたの。僕だけじゃない、みんな、全国の。特に東京です。

羽田：あそこは東大の本郷会館周辺の旅館ですか、修学旅行生が泊まるような。

手島：そうそう。泊まるような。本郷は昔は修学旅行生が泊まる旅館街だったの。その旅館ほとんど全部借り切って、そこに泊まり込むわけ。特に都内の学生は、全部ほとんどその頃全共闘系に。いなくなっちゃうわけだから。幹部をはじめ、ほとんど大多数の人がいなくなるわけ。ただ一つ唯一抵抗したのは中央大学。中大の常置委員会って、これまたちょっと大学の内部の話なんだけど。そういうものをつくるのに反対していた戦いがあったんだけど、東大闘争と並行して。そこのところは、ちょうど中大の理工学部って東大本郷のすぐ近くにあるのね。

田中：そうですね。近いですね。

手島：僕はそれで理学部1号館って言って、安田講堂のすぐ裏にある理学部の校舎に泊まり込まされたわけね。その理由が、理学部1号館にはその当時日本に2台しかないコンピューターがあったの。もう1台はどこにあったんだろうかな。要するに東大の理学部1号館と、それからもう一つあって。このコンピューターは日本に2台しかない。もちろんメインストリームコンピューターね。パソコンじゃなくてでかいやつ。これを壊されちゃ困るっていうんで、東大理学部守るって。守るってどうするんだって、泊まり込んでいるすぐ裏だから。毎晩のように全共闘が押し寄せてくるわけだよ、隊列組んで。その押し寄せてくるのを跳ね返して、石投げたりしてなんかして跳ね返して守り抜くというのが、私に課せられた任務だったんだな。それが1カ月続いたもんね。

羽田：それを見て69年の時も、北大の封鎖解除¹¹⁾でいろいろと体張っていて大変な思いをしたっていうのが、団結性もあるっていうのは分かりながら、全国の大学の中ではやっぱり学生諸君をそんな危険な目に遭わせちゃいけないので、機動隊使ってやることもあるわけですよね。福島大学なんかはすぐに何とかしないでほったらかし

といて、学生が疲れた頃、機動隊入れてやっているんですね。これは大学と警察の関係でいったら、それでいいのかという結構批判もあるけれども、もう一方で言うと、学生自身をそういう目に遭わせていいのかと考えると、警察による排除っていうのも一つの方法でしょう。

今から思っても、勉強してなきゃいけない人たちがそんなことやっているっていう。そこら辺の判断っていうのは実際の現場の中で起きなかったのか。それからそれ続けていてどうなりたかったのかっていうのが、多分今から見ると、平時から見ると分かりにくい部分だと思うんですよね。ある時期から共産党も青年学生の趣旨は勉強することだ。レーニンなんか引用しているね。学生運動よりももっと勉強しろみたいなことを、『前衛』かなんかで論文書いたような。

手島：68年の初冬に2つの任務、学生運動もそれぞれの任務っていうのは、共産党の論文で出されていて、それを受けて共産党全学連も、それは全学連の方針にしたわけ。

羽田：そここのバランスとして、当時いろんな思いはありながら、学生運動の形としてどうだったのかなというあたりはどうですか、今から思っ。

手島：学生運動の2つの任務、それはいいとして、とりあえず目の前にあるのは東大のこの困難な事態であって。これを解決すれば何とかなると。一点突破、全面展開で、東大さえ守れば何とかなると、あとは勝つという見通しだよね。大体の人は喜んで東大行くわけですよ。いったん東大で勝ってしまえば、その意欲とかをもって、他の大学全部同じようになるんだという見通しですよ。

羽田：学生の判断ではそれはそうかもしれないけど、大人の判断として別に全学連が主導したわけじゃない、実体的には。そこが。

手島：11月の段階でかなり勝敗ははっきりしてきたのね。これは、例の『東大闘争の語り』、小杉さんの本を読むとよくわかる¹²⁾。それからもっとよく分かったの、平田さんの自伝的、『未完の時代』か¹³⁾。これは内部のことまでよく書いている、これが一番よく分かる。つまり11月の段階で、共産党は東大の共産党現地指導部が左にはね過ぎているという論評をするわけ。そして学生指導の首を切ったわけじゃないんだろうけど、強力な指導入れるわけ。つまり全共闘と戦術の激しさを競うようなやり方は間違っているということで。その時から紛争の物理的な解決は警官の導入というのはもう頭にあるわけ。ただし政治的な解決はそれだけじゃ済まないでしょ。東大の自治会全部崩れているから、これは正当な方法だよね。代表、各学部ごとに学生大会を開いて代表団を選んで、その代表団と大学当局が交渉することによって大学紛争を処理するという政治方針が固まって、急速に学部代表団選出運動が始まるわけ。

羽田：7学部代表団交渉¹⁴⁾。

手島：そうそう。7学部。結局11学部ぐらいあったんだ。できないところもあったんだ。工学部ができなかった。調べりゃすぐ分かる話だけど。ただこの路線は僕はすごいなと思いました。やっぱり政治にはそれしかないんだって。手続き的にはもっと正当

でしょ。学生自治会がないから、学生大会を開いて学部代表を選んで、正当な手続きによって選ばれた学生代表と大学当局の間で団交を行なう。当局に言わせれば交渉なんだけど、とにかく行なうと。そこで話し合って妥協点見いだす。妥協点の一つが全構成員自治をうたった10項目確認書になるわけだ。政治的にこれでもう勝つなと思って。ただその時にやっぱり抵抗したのは東大の現地指導部。僕が例えば1年半北大の時に、やっぱりそういう、基本的にはそうなんだけど、目の前に追われてどうしても戦術の過激さを競っちゃうわけ。

羽田：今までずっと信じた慣性ってありますから。急にそういうふうの方針が学生の中から出てこなかったからね、なかなか。

手島：出てこない。これは強力な共産党の中央というかの指導がなければ、あり得なかった。

羽田：それに反発する人もいたでしょうね。北大でもやっぱり死者は出なかったけど、僕らの先輩なんかでも投石で目つぶして、研究者として非常にハンディを負った人もいるし。

手島：そういう路線があった。これもその路線で学部代表団選ばれてく過程で、全共闘側もこのままで行くと敗北と分かっているから、7学部代表団の最大の代表団である東大駒場の代表団を選ぶ時の学生大会をつぶしにかかるわけだね。それが東大闘争の最後の武力的な対決。駒場寮の屋上でやるの。いろんな方法考えてね。その屋上でやって、教養部の学生大会やるのに、向こうが全力で襲いかかってくるわけ。その攻防が一番激しかったんだけど、結局それでおしまい。

後で残ったのは、安田講堂。ほんとにお飾りというか、セレモニーにしか過ぎなかった。要するに駒場の学生大会を守れっていうわけだよ、われわれは。理学部1号館のコンピューター守れってくだらない命令もあったんだけど、一応大義名分はそれなの。ここで駒場で学生代表団が決定してしまえば、東大闘争の優劣も決定するという事態だったから、それで仕方がなく自分たち泊まり込んで行って。その後すぐ機動隊導入があった。

分かっていたよ。機動隊導入、共産党がさせたわけじゃないんだよ。当局がやっぱりさせたのね。ここまで学生代表団となったから、合意があったから、あとは警察の力をもって占拠を解決するというのは向こうの加藤一郎大学執行部の判断なんだけど。それがこっちが分かっていたから、当局が大学、機動隊入れる前の日の晩に一斉に引き上げるわけ。僕も一緒に。東大の理学部1号館にこもっている300人ぐらいの仲間を引き連れて、すぐ近くの東京教育大学に逃げるわけですよ。これが東大闘争。

そういう中で培われたいろんなパターンっていうのがあった上での69年の北大闘争なのね。全共闘や三派革マルが堀内日共民青打倒って最初から叫んだのは、それはもう分かっているわけよ。つまり学内における日共民青系の学部統一代表団の運動によって、彼らの何だっけ、大学解体か、解体が阻止されて負けるわけでしょ。

彼らにとって見てしまえば、権力も当面敵なんだけど、まず権力よりも学内の日共民青が最大の敵だということになるわけ。不思議だって言った人もいたけれど、そういう考え方するのも分かる。

そこのところが東大闘争との、東大闘争の後に学園闘争が始まった一つの特徴なんだよね。みんな東大闘争のことを学習して経験して、その後の地平で起こったのが69年だと。

こっち側も同じ。東大のように学部代表団で、要するに大学当局と大学との矛盾は、要求は全部交渉して、正式な手続きでの交渉を経て、そして最終的には全構成員自治は怪しいんだけど。それはともかく内容的に評価できると思うんだけど、全構成員自治といわれるものを勝ち取ることが、学園闘争の目標として明確に最初から設定されている。そこからスタートするわけ。向こう側は路線しいてる。われわれの路線を邪魔する日共民青をまずたたきつぶすというところから始まるわけだよ。

羽田：上野さんが『(北大)1969』で書かれているけど。つまり堀内体制がスタートしているろんな改革を始めると、つぶすっていう。上野さんなんかのを見ると、改革をつぶすためにやるというのがすごく特徴的なと思います¹⁵⁾。なんかそういう雰囲気とかいうのは、この時はでも全学連のほうですか。

手島：いや、まだ。僕、全学連行ったのは70年。

羽田：そうですか。

手島：僕だけの話をすると、そういうことで北大闘争が始まって、北大闘争の前半69年の夏までは任期があるから、そこまで学連の任期やって、69年の夏で1年交代で次の腰岡君に委員長移って降りるわけですよ。

そういうことをしている時に全学連のほうから、それこそ70年安保闘争を戦う全学連をつくるためには、全学連、今までは委員長1人、副委員長が2人かな。で、書記長、書記長って体制だったのね。副委員長を5人に増やすと。この時の理屈、総評を見なさい。総評、十何人の副議長がいるだろう。それは単産のものだ。だから全学連もそういうふうにする必要があるっていうんで、副委員長の枠が一気に2人から5人に増やされて、それで私が副委員長として。道学連、北海道から1人出させてことね、5人ってことは。北海道と名古屋と、もちろん東京。北海道、東京、名古屋、それから東北大もいた。もう一つは京大か、立命館か。この5つの大学から副委員長出してっていうことになって、北海道代表として私が行くわけですよ。ほんとには私じゃない人が候補に挙がっていたんだけど。

羽田：嫌がった。それで翌年に委員長ですか。

手島：いや、副委員長を2期やるの。1970年と71年でやって、やめそこなった。おまえが一番いいんだって。なんでいいのかっていうと、おまえは北大の教育学部ですぐ卒業できそうだと、あんまり勉強しなくても。他のところは結構やっぱり大変なの。東北大学は工学部から出ていたのかな。名古屋は経済かな。結構卒業条件が厳

しくて、どうしてもやめる力が強いわけよ。やめたいって力が。合理的な理由もあるわけよね、また。これだけ単位が残っているとかって言えばさ。何単位を取って卒業しなきゃならない、確かにそうだなと思って、最後力負けしたわけです。やめそこないの力負け。

- 1) 「北大紛争」の概略については、『北大百年史』通説(1982年)第十章第一節「大学紛争とその後の北大」(pp.456-463)を参照のこと
- 2) 北大における学生自治関係の履歴は、「手島繁一さんの略歴」(手島繁一氏のホームページ：<https://e-kyodo.sakura.ne.jp/tejima/index.html>)による(2025年11月7日閲覧)。インタビューでは、北大学連委員長就任や全学連副委員長就任の時期に齟齬が見られるが、正確な時期を特定できる資料は見つからない。
- 3) 法政大学大原社会問題研究所ホームページ「2005年度スタッフ詳細-手島繁一」(https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/about/staff/staff_detail/?staff_id=5-001-9000109&staff_year=2005)より(2025年12月3日閲覧)
- 4) 前掲手島繁一氏のホームページ。
- 5) 手島氏は日本共産党系(民青系)全学連に所属していたため、校舎封鎖などの闘争方針をめぐって、北大でも東大でも全共闘(全学共闘会議)とは対立する立場にあったことを申し添えておく。
- 6) 『資料 戦後学生運動』別巻(三一書房、1970年)掲載の「大会人事」(pp.270-278)によると、川上徹が全学連中央執行委員長であったのは、1964年12月の第15回全国大会から65年7月の第16回全国大会の間とみられる。
- 7) 手島繁一「私論「北大紛争」」(「北大1969」編集委員会編『北大1969-あゝのころ私たちが求めていたもの』メディアデザイン事務所マツモト、2021年) p.33
- 8) 1968年9月7日、東大で自治会中央委員会・院生協議会・職員組合等の7者協議会が、病院封鎖に反対して集会を開き、全共闘と衝突した(法政大学大原社会問題研究所編『新版 社会・労働運動大年表』労働旬報社、1995年、p.863)
- 9) 1968年11月12日、東大総合図書館封鎖をめぐって、全共闘と反対派が衝突し、70人以上が負傷した(前掲『新版 社会・労働運動大年表』 p.865)
- 10) 北海道大学大学院学生による自治組織。北大院生協議会の歴史および活動については、北大院生協議会史編集委員会編『北大院生協議会史』(花伝社、2024年)を参照。
- 11) 手島委員長時代の1969年6月、前月五派連合系学生により封鎖された大学事務局を、北大学連の学生が封鎖解除している(前掲『北大百年史』通説、p.1175)。なお、『北大百年史』通説の「大学紛争年表」(pp.1174-1209)には、手島委員長名の北大学連関係資料も掲載されているが、名前が手島ではなく「手嶋」となっている。
- 12) 小杉亮子『東大闘争の語り 社会運動の予告と戦略』(新曜社、2018年)
- 13) 平田勝『未完の時代 1960年代の記録』(花伝社、2020年)
- 14) 東大紛争の長期化によって入試中止、大量留年が懸念されるようになったことで事態収拾への動きが始まり、1969年1月10日に7学部集会を開き、集会後の非公開交渉で医学部処分撤回等10項目の確認書を大学当局と取り交わした(前掲『新版 社会・労働運動大年表』 p.868)
- 15) 上野雅樹「私にとっての北大闘争-今も残る「二つの謎」」(「北大1969」編集委員会編『北大1969-あゝのころ私たちが求めていたもの』メディアデザイン事務所マツモト、2021年) p.213

(たなか さとこ／神奈川大学大学資料編纂室)